

## 内モンゴルホルチン地方におけるシャマニズムに関する研究

—復興について—

A study on the revival of shamanism in Horqin, Inner Mongolia

サラングワ

Sarangowa

**要旨** 今日の中国は社会主義市場経済を実施し、社会が全面的に発展を遂げている。一方で、こう言った社会の背景のもとに、シャマニズムを含めた民間信仰が復活している。内モンゴルのホルチン地方のシャマニズムの信仰が、在来の世界観を持ちながら復興現象を見せ、人々の日常生活に生き、シャマンが依頼者の請求に応じて自分の役割を果たして人々に好まれている。しかも時代的特徴、つまり変容の姿をも見せている。本研究は今現在におけるホルチン地方のシャマニズムのあり方、つまり復興と変容に着目して、モンゴル人のシャマニズムの信仰体系、おもにシャマンの活動をめぐる諸現象、社会の反応などを分析しながらホルチン地方のシャマニズムの復興と変容の特徴を明らかにすることを目的としている。そのため、ホルチン地方のシャマニズムを復興と変容という二つの内容に分けて述べることにした。今回は復興現象を対象にした。また、論文に用いる資料としては文献資料と筆者が2002年2月、2003年8月、9月に現地調査を行って得た資料を用いた。

### はじめに

16世紀以降、支配者たちは仏教をモンゴル全体に広げる目的で、モンゴル人のシャマニズムの信仰を廃棄させ、仏教の教義を受け入れさせて仏教の教義で人々の頭を武装しようと考えていた。シャマンは、シャマニズム信仰の有力な宣伝者で実践者、そして伝承者でもある。シャマンが最初に弾圧される対象となった。もちろんシャマンをはじめ、モンゴル一般の人々の抵抗があったにも拘らず、モンゴル人は確かに全民族的に仏教徒になった。そのため、内モンゴルの場合、ホルチン地方を除くとシャマンがほとんどその姿を消してしまった。ホルチン地方のシャマニズムはホルチンモンゴル人に信仰され、シャマンは人々の要請に応じて、問題解決に取り組んできた。中国の文化大革命（1966～1976）の時代に民間信仰は迷信とされ、弾圧される運命に直面した。そのため、シャマンほとんど公然とその機能を果たすことができなくなった。1966年に文化大革命が始まると、民間信仰が一挙に「牛鬼蛇神」、つまり迷信とみなされ、廃棄しなければならないという運命に直面した。そのため、シャマンとその家族の成員が自ら神具の神衣、神像などを政府に引き渡したり、山に捨てたりした。たとえば、ホルチン地方のフレーホショ（庫倫旗）に住むシャマンのP氏の妻は12キログラムもあった神具を驢馬に乗せて政府に差し出したという。

中国が改革開放政策を実施した、特に20世紀90年代以来、中国各地の民間信仰が復興し始めた。現在、ホルチン地方のモンゴル人の伝統信仰としてのシャマニズムは復興し、社会に機能している。

ここでまずホルチン地方について簡単な紹介をしたい。

「“ホルチン”という言葉は『元朝秘史』に最初に出てくる。それによると、“ホルチン”という言葉の“ホル”(hor [hoor])を漢字で“豁児”と写し、その右側の中国語の逐語訳は“箭筒”(矢筒の意)で、“ホルチン”を漢字で“豁児赤你”と写し、中国語で“帶弓箭筒的”(矢筒を持った人の意)と逐語訳した」(バヤル注釈 180:1073-1074)。「“ホルチン”というのは13世紀に、チンギス・ハーン(cinggs haan [cinggis han])の保安部隊の呼称であった」(呼日樂沙・白翠英 1998:17)。「15世紀の前半ごろになって、ホルチンというと、チンギス・ハーンの二番目の弟のハプトハサル(habt hasar [habtu hasar])の領地とその後代の統治を中心として構成された東モンゴルの一つの強い部族のことであった」(古日查・長命 2001:1)。「清代になって、「ホルチン地方」、「ホルチン草原」という名前が定着して“ホルチン”という言葉は部落の名前であり、地名ともなった。その範囲は、南が中国の今の遼寧省の瀋陽市付近の長城と臨界して、北がソロン<sup>1</sup>と臨界して、南北1,050kmで、東西では435kmの広い地域であった」(呼日樂沙・白翠英 1998:22)。

今のホルチン地方というのは、内モンゴルの東北地方の通遼市のことを指している<sup>2</sup>。ホルチン地方では、モンゴル族が主体民族で、モンゴル族のほか数多くの漢民族の住民がいる。モンゴル語のホショとは、中国語で旗と言ひ、中国の行政単位の県にあたる。

## I. 内モンゴルのシャマニズム

内モンゴルのシャマニズムというと、それは、アルタイ系諸民族の一つであるモンゴル族の中の内モンゴルのシャマニズムのことを指している。モンゴルのシャマニズムとは、それはモンゴル人<sup>3</sup>の昔からの超自然の世界、つまり精霊の世界についての信仰を中心とし、ボーと言われる宗教職能者、つまりシャマンをこの信仰体系の実践者とした世界観と価値観の総体である。モンゴル人自身はそれをボー・ムルグル(boe murgur [bohe murgur])<sup>4</sup>と言う。モンゴル語でボー(boe [bohe])というのは、シャマンの総称であるが、狭義には、男のシャマンをボーという。これに対して女のシャマンをイトガン(itugan[itu-gan])或いは、オドゲン(udgen [udgen], ホルチン地方ではこのように呼ぶ)という。「モンゴル人が仏教を摂取した後は、これ(シャマニズムのこと。筆者注)を黒教と名づけた……仏教を黄教と名づけたのに対しての名称であろう」(バンザロフ 1971:5)。黒教をモンゴル語で“ハラシャシン”(har šasin [hara šasin])、或いは“ハリン・シャシン”(harin šasin [hara in šasin])という。ここで、“ハラ”(har [hara])というのは黒いとか黒色という意味で、“シャシン”というのは、宗教という意味を表している。一方では、内モンゴルの場合、仏教のことを黄教という言い方が定着しているが、シャマニズムのことを黒教とは一般的に言わないのである。もちろん、黒教というとシャマニズムのことを言っていると分かるが、普通ではシャマニズムのことを“ボー・ムルグル”と言う。ここで“ムルグル”murgur [murgur])というのは「拜む、信仰する」という意味を持っている。ボーというのは、シャマニズムの信仰体系の超自然の世界、つまり精霊の世界と人間の世界の間に仲介となって、自分の属している集団のためにその能力を尽くす人のことを言っている。

## 1) 白いシャマンと黒いシャマン

シャマニズムを黒教という言い方は内モンゴル、特にホルチン地方では、一般に使われないが、明末清初に、モンゴルに仏教が広がるプロセスのなかでホルチン地方のシャマンが黒いシャマンと白いシャマンという二つの派に分裂して、黒いシャマンと白いシャマンという言い方が定着したのである。黒いシャマンのことをモンゴル人は“ハラボー” (har bəe [hara bəhe])、或いは“ハラジュクゲンボー” (har zugen bəe [hara zug un bəhe]、つまり黒い方向のシャマン) と言う。これに対して、“チャガンボー” (cagan bəe [cagan bəhe])、或いは“チャガンジュクゲンボー” (cagan zugen bəe [cagan zug un bəhe] 白い方向のシャマン) という。ここで、黒いシャマンと白いシャマンというのはどのようなシャマンを言っているかという、仏教に順応したかどうかによって、分けられたものである。仏教に順応して、仏を祭り、仏教の教義を受け入れて、シャマンの行う儀礼にも仏教の内容を取り入れたのが白いシャマンと呼ばれ、仏教に反対し、仏教を受け入れることを拒否して、シャマニズムの昔からの諸要素を堅く守ったのが黒いシャマンと呼ばれた。

## 2) モンゴルのシャマニズム信仰体系の中核としてのオンゴッド

祖先の象徴であるオッゴッド（祖先神・神像）とシャマンの助けとなるオンゴッド（精霊・神像）という形で二つに分けてみてみよう。

モンゴルのシャマニズムの信仰体系における“オンゴン” (onggun [onggun]) という言葉の意味は、文化人類学に使われている精霊のことであり、この中に、祖霊、神霊、守護霊、補助霊などが含まれている。シャマニズムの信仰は祖先崇拜と直接な関係があって、超自然の精霊についての信仰はこの信仰体系の中核である。フェルトで造ったオンゴッドは家の守護神である祖先神の像を指している。また、精霊であり、神像でもある。家神のオンゴッド以外、牧畜の守護神ジャーチ (ziyaaci [ziyagaci]) とボームル (boomul [bagumal]) をも祭っていた。

16世紀以降、仏教をモンゴル社会に広げる目的のもとで、家ごとに祭られていたフェルトや布で作ったオンゴッド（神像＝先祖の霊＝家神）を集めてきて、焼いた。その後、民間では、家単位としてオンゴッドを公然と祭ることができなくなった。その故、オンゴッドというと、ホルチン地方では人々はシャマンが祭られている神像のことだけを思いつくようになった。家単位でオンゴッドが公然と祭られなくなったので、人々は先祖の霊を神として信仰しなくなったかという、決してそうではない。現在のホルチン地方では所によって、昔のようにフェルトや布で人形を作り祖先神として祭ることが平素の生活にほとんど見られないけれども、完全に姿を消したことはない。毎年5の清明節の二三日前から主婦たちが祖先のために新服を作る。その服とは、フェルトや布で手の平ぐらいの大きさに服を切り、清明節の日に墓参りをするとき、供物の一種としてほかの供物と一緒に灰しか残らないまで焼いて祖先を供養する。ここで注目したいのは、清明節の日に祖先のために作ったこの小さな服である。先祖を供養するために作った服（人形とも言えるだろう）が、昔のオンゴッド、つまり神像と何らかの関係があるのではないかということである。ここで、この布やフェルトで作った小さな服が祖先神を喜ばせる機能を果たしているのである。

ホルチン地方では、“オンゴン” というのは昔の「精霊」という意味を持つ以外、また

「墓」という意味で使われるのが一般的である。“オンゴンのガジャル (gazr [gazar])”と  
 言えば、「墓場」という意味を持っている。また、モンゴルのシャマンはフェルト、銅、  
 木製のオンゴンを祭ってきた。シャマンの助けとなるオンゴンの種類と数が多いので、モ  
 ンゴル語の複数を表す表現語を使い、つまり“オンゴッド”という。“オンゴッド”とい  
 うのももちろん「たくさんの墓」という複数の意味を持っているが、さらに、ホルチン地方  
 のシャマニズムではシャマンの助けとなる守護霊を含んだそれぞれ名前をもった「精霊た  
 ち」を意味している。その精霊には先祖の精霊、動物の精霊と植物の精霊が含まれている。  
 この精霊たちは墓場、山、木などを居場所としているとされている。そのそれぞれ名前を  
 もった精霊たちの象徴とは、シャマンによって祭られている大小不同の青銅や木、布、フェ  
 ルト、石、羊毛、銀、鉄などで作った神像である。これら神像をもオンゴッドと言う。い  
 わば、精霊たちの依代である。シャマンが病気治療を行うときこれら精霊たちの助けを求  
 める場合、祈祷文を唱え、山や木に住んでいる精霊たちを招き呼び、シャマンのところ  
 ある神像に憑依させる。これをモンゴル語で“オンゴッド・オン (oon [iyen])・エム  
 ロールホ (emloulh [amilagolhu])”、つまり「神像に命を入らせる」という意味である。  
 そしてシャマンがその「命」が入ったオンゴッドの超自然の霊的力を借りて病気治療を行  
 うのである。



(上の写真はあるシャマンのもっているオンゴッドである。数珠に銅製の矢がつけてある  
 が、それが天の矢と言われている。病気治療のときに使われている。写真の左のところに  
 有るのは大小不同のオンゴッドたち、つまり名前をもった精霊（神像）たちである。その  
 中に、ホルチン地方のシャマンの元祖とされているホブグタイ・シャマンの印鑑とチベッ  
 ト文字が入った印鑑がある。残念ながらその印鑑に彫られてあるチベット文字を読み取る  
 ことができなかつた。今後突き詰めていきたい。写真の右の上にある穴がある銅製の道具  
 はホブグタイ・シャマンの印鑑である)。

### 3) シャマニズムに関するモンゴル語表現と文化人類学の用語

シャマンが病気治療にあたってトランス<sup>6</sup>状態に入ることをモンゴル語で“ボー・オロ  
 シホ” (orsih [orosiho]) という。ホルチン地方のシャマンに二種類の“バッシ” (bagsi

[bagsi]) がいる。“バッシ”という言葉は、シベリアの幾つかの民族のなかではシャマン<sup>7</sup>を言う。現在のモンゴル語では、一番広く使われるのは学校の教師のことを“バッシ”という。また、職場においては先輩のことを“バッシ”という。ホルチン地方のシャマンにとって、“バッシ”というと、弟子入り先の先輩シャマン（老シャマン）、つまり師匠のことを意味している。また、もう一種類の“バッシ”とは、シャマンに関わる超自然の精霊である。特に、諸精霊の中で、主として憑いている守護霊のことを意味している。つまり先祖シャマンに憑いていた精霊や先祖シャマンの霊である。上に挙げた“オンゴッド”はシャマンにとっては“バッシ”である。これは、守護霊と補助霊を含んだ諸精霊はシャマンの助けとなり、病気治療してくれるのであるからである。

一方では、シャマンの助けとなる補助霊を“オンゴッド”と言い、守護霊を“バッシ”と言うシャマンもいる。シャマンの夢のなかに守護霊である精霊が病気治療や儀礼を行う方法、精霊を招く方法、シャマンとして活動するのに鉄則のように守るべきルールなどを教えているので、先生という意味の“バッシ”という言葉で守護霊を呼ぶのは当たり前のことである。

## II. ホルチン地方のシャマニズム

ここで、まず1966～1978年におけるホルチン地方のシャマニズムの状況を見てみることにする。シャマンが弾圧される一方、ホルチンジェゲンガロンホイトホシヨ（科爾沁左翼後旗）で骨の治療を行うシャマン医者（モンゴル語でヤスベラチ・ボーという。後に詳述）が公然と活動することを政府に部分的に許可され、骨科医院（接骨院）が設立された。この接骨院は1976年に骨の治療を行うシャマンを主として国立病院として設立されたものである。創立者はJとLという骨の治療を専門としたシャマンである。シャマンの治療する能力を政府が認めたのである。当時、民間で接骨医として有名であったLという女のシャマンが政府の許可を得て、周辺のほかの接骨医シャマン（ヤスベラチ・ボー）を集めて、実際に治療を行うことを通じて、治療能力が強い人を10人ぐらい残して、接骨院を作った。

ホルチン地方のシャマニズムに顕著な氏族性、地方性、時代性が刻まれている。ホルチン地方の今現在のシャマンはその呼び方及び職能により、ボー、ホンダン、オドゲン、ヤスベラチ、ウジェーチ、ライチン (laicin [laicin]) の別がある。ホルチン地方のシャマンたちは概ねに憑依型と脱魂型<sup>8</sup>という2つの種類の方法で、超自然の世界、つまり精霊の世界と関わりをもち、依頼者のため問題を解決してきた。

### ボー

ボーというのは、モンゴル語で、シャマンの総称であり、一方では、男のシャマンをボーと言い、女のシャマンをオドゲンという。このボーにももちろん上に述べた白いシャマンと黒いシャマンが含まれている。さらに、世襲型と非世襲型、習得型シャマンが含まれている。ホルチン地方では、人々から“ボー”と呼ばれているシャマンに男性がいれば、女性もいる。

### オドゲン

ホルチン地方ではオドゲンと呼ばれる女のシャマンの主な機能は助産婦および魂が体から抜き離れた子供の魂を体に呼び戻す治療や母に嫌われた子牛、子羊を母に戻せる「治療」を行ってきた。ある意味では、ホルチン地方では、オドゲンというと人々は伝統的な治療

能力を持った助産婦のことをイメージしている。そのため、病院に勤めている産科の女性医者をもオドゲン、或いはオドゲン・エムチ (emci [emci]、医者) という。つまり産科の先生という意味である。オドゲンの守護霊は、鷹の精霊で、伝承の方法としては、姑から嫁に伝えるのである。

#### ホンダン

ホルチン地方のシャマンの中に、ホンダンという天を祭る儀礼を主として執り行うシャマンがいる。ホンダン・シャマンを天の甥と信仰されている。そのため、ホンダンの身分が高い。モンゴルのシャマニズムの信仰の中での最高の神である「永遠の天」への祭りを司ってきたからである。これは、ホンダン・シャマンの主な職能である。また、病気治療に当たっては、用いる神具からみると、ほかのシャマンよりいくつか特別のものがある。それは、まず、ホルチン地方のシャマンの元祖であるホブグタイ (hobugtai [hobugutai]) ・シャマンの青銅像と印鑑をもっていることである。ホブグタイ・シャマンはホルチン地方のどの種類のシャマンからも自分の祖師とみなされ、最も尊敬されている。ホブグタイ・シャマンの青銅像と印鑑を持っているシャマンは世襲型のホンダン・シャマンによく見られる。ホンダンという言葉は昔のホンホダンという部落の名前から由来していると主張する学者はいるが、ホルチン地方ではホンダンというのは先祖の名前で、守護霊として信仰しているホンダン・シャマンがいる。

#### ヤスベラチ

ヤスベラチとは今のホルチン地方で一番広い意味で知られているシャマンである。この種類のシャマンは骨の専門治療者である。伝説によれば、今のホルチン地方のヤスベラチ・ポーの先祖がチングス・ハーンの時代に戦争で負傷した兵士たちに治療を行っていたと言われている。“ヤス”は、骨という意味で、“ベラチ”は、握るという意味で、“ヤスベラチ”は「骨を握る」ということである。その職能によって名づけられた名前である。ホルチン地方のモンゴル人は一般に、ただヤスベラチと呼ぶが、ここで明確にさせるためヤスベラチ・ポー、つまり骨の治療を専門としたシャマンという言い方をとった。ヤスベラチ・ポーは、今のホルチン地方のシャマニズムの中に非常に重要な位置を示しているので、後に詳述する。

#### ウジェーチ

ホルチン地方では、人々からウジェーチと呼ばれているシャマンの一種類がある。ウジェーチは、モンゴル語で、「分かる人」、「占い者」という意味を持っている。占いを行うシャマン、いわば占い師である。この言葉そのものがすでに信仰者に超自然の霊的な力を持つ人として信じられ、依頼に応じて通常の心理状態で解決できない問題の解決に取り組んできた。一方、占いを行わないシャマンはほとんどいないのである。今現在では、このウジェーチとは、ほかの種類のシャマンと違って、占いを行うのが専門で、伝統的な祭りに祭司者として参加しない。また、病気治療に当たっては、ほとんどのウジェーチは憑き物を追い払う治療だけを行う。

#### ライチン

ライチンという言葉自体は、「チベット語の《ナイチュン》(naicuying[naicuiing]—筆者注) から来たのである。ホルチン地方の方言では《ナ》という子音を《ラ》に発音される場合があるので、《ナイチョン》がライチンに変わった。ナイチョンとは、チベットで

は寺に住みついているシャマンである」(尼瑪 1999:221)。ライチンは仏教に順応した白いシャマンである。ライチンの守護霊は角が交錯した羊に乗っているダムジンと言う名前の職人である。伝説による、ダムジンがシャマンたちの道具(神具)を作ってあげたと言う。ライチンは病気治療や占いを行なう。ホルチン地方のシャマンを伝承の方法によって、世襲型と非世襲型と習得型(自己意志型)と三つに分類することができる。

### Ⅲ. ホルチン地方のシャマニズムの復興

#### 1. ホルチン地方のシャマニズムの復興の条件

法律の許容する範囲内で宗教活動を行うことが可能になり、文化大革命時代に「牛鬼蛇神」とされた民間信仰が再び活発になってきた。というものの、政府はこの現象に対して非常に敏感である。中国政府の宗教政策の緩みはシャマニズムの復興に外部的な条件を提供している。

一方では、時代は進み社会が発展を絶えず遂げている現代では、衰退の時期を経験したホルチン地方のシャマニズムの復興はそっくりそのままの復興ではなく、伝統を基盤として再構築されている。シャマンとして活動させるため精霊から送ったメッセージ、つまり「シャマン病」に罹って、精霊からの呼びかけだと分かっても、シャマンになりたくないということで、シャマンになることを拒否する人もいる。ホルチン地方の世襲型シャマンは強い伝承力を持ち、子孫によって継承されている。また、神話伝説、シャマニズムの世界観は民衆の日常生活に生き、伝承されてきた。亡くなった先祖シャマンの霊、或いは亡くなった先祖シャマンに憑依していた守護霊が継続的に非常に重要な役割を果たしているとされている。守護霊に選ばれて、シャマンの後継者になることを拒むと何らかの被害を受ける。守護霊を恐れて守護霊の呼びかけに応じようと努める場合もある。ホルチン地方では、ラマ僧とシャマンの戦いをめぐる伝説が多く残されている。これらの伝説が、ホルチン地方のシャマニズムの伝承の性質に何らかの手がかりを提供している。ホルチン地方のシャマンの元祖とされているホブグタイ・シャマンと仏の間に行われた戦いについての伝説は、二つのタイプがある。一つはホブグタイ・シャマンと仏との戦いの結果ホブグタイ・シャマンが仏に敗れて仏教の教義を受け入れるようになったというタイプと、もう一つは、ホブグタイ・シャマンと仏の戦いの結果、仏は敗れてホブグタイ・シャマンは仏教の教義を拒否することを許され、シャマンとして自由に活動するようになったというタイプがあることを調査で分かった。もちろん、モンゴルのシャマニズムの神話伝説は、主として口承で伝えられてきたので、民衆の中で内容が多少異なった形で伝わっているが、結果として基本的に上に述べた二つのタイプに含まれる。ホルチン地方のシャマンの元祖であるホブグタイ・シャマンが仏に敗れて仏教に順応したと語っていることから、今のホルチン地方の仏教に順応した白いシャマンの存在の合理性を明らかにしている。

調査中シャマンたちは「シャマンになる人物はほとんど生まれつきに優しい心を持ち、疲れや苦しみを怖がらなく、慈愛にあふれた熱心者であることが要求されている。シャマンこそ普通の人と違って、一般の人に理解しにくくいろいろな苦しみを経験する。それにも拘らず、シャマンは患者のため真心を込め、全力をあげる」と評価している。シャマンになるため先輩シャマンに弟子入りして技法を習う。ホルチン地方のシャマンのS氏は道徳的に弟子に以下の内容を教える：①権力を欲しがらない。②金銭を欲しがらない。③

色欲におぼれない。④わたしたちシャマンを信じて来た患者の貧乏と裕福を問わず全力をあげて治療して挙げなければならないと教える。これはシャマンとして活動する上での道徳的な規範である。

## 2. ホルチン地方のシャマニズムの復興

今現代のホルチン地方で、シャマンの病気治療と儀礼はシャマニズムの世界観、つまり精霊に関する信仰が全体を貫いている。信仰は時代とともに生きている伝統文化なので、復興の姿の中に、時代の特徴が反映されている。シャマンの重要な役割は治療者である。復興現象におけるホルチン地方のシャマニズムの一つの重要な内容は伝統的治療の復興である。

### 1) 伝統的治療の復興

ホルチン地方に限らず、遙かな昔から、世界各地のシャマンの最も重要な役割は病気治療で、ある意味では、シャマンは医師である。治療を行うことはシャマンにとって昔からの聖職である。現代科学が進み、現代医学がより人々の生活に浸透している今日でも、シャマンの果たしている役割の中で病気治療は非常に重要な位置を占めている。現在では、ホルチン地方のシャマンがいろいろな治療を行う中で、骨に関する治療を専門とした接骨医としてのシャマン、つまりヤスベラチ・ボーの影響力は前より広まり、しかもより人気を得つつある。骨（接骨、整骨）の治療を行うシャマンの治療方法としては、酒を骨の怪我したところに吹きかけて、両手で骨折を元に戻して回復させることである。現在のヤスベラチ・ボーの社会でのパターンとは、家において治療を行う現象が多く存在している。一方、個人の病院を設立して治療を行う現象、また国立病院で接骨医として勤めている現象がある。町や都市部に住むヤスベラチ・ボーは個人病院の形を取る傾向があり、村落に住むヤスベラチ・ボーは家で治療を行うのはほとんどである。ホルチン地方の出身のヤスベラチ・ボーがホルチン地方に限らず、内モンゴルの各地に行って個人の病院を設立して治療を行なっている。たとえば、フフホト市、赤峰市、フルンボイル市などにホルチン地方のヤスベラチ・ボー出身の人々が個人の病院を作って治療を行っている。また、治療に当たって使われる酒の量について、一般的に、1.2ℓの酒を2.30人の患者に使うこともあるし、ときに、0.5ℓの酒を50人の患者にも使えることもあるという。

ホルチンジェゲンガロンホイトホショの蒙医接骨医院長であったヤスベラチ・ボーのJ氏はホルチン地方の骨の治療を専門としたシャマンの氏族の第四代目である。この接骨医院は、骨の治療を専門とした有名な病院である。前に述べたように、当時骨の治療を専門としたヤスベラチ・ボーのL氏が政府の許可を得て設立した国立病院である。この病院に勤めているJ氏をはじめヤスベラチ・ボーたちは祖伝の神秘的な治療技術をもって治療を行っている。

J氏は、1990年に中国の深圳市で開かれた「第一回漢方骨傷学シンポジウム」に参加して、患者の骨の怪我をその場で回復させて、参加者と観衆たちを驚かせた。当時、J氏が使った用具というのはやはり酒である。しかし、単なる酒の力ではなく、先祖から受けた祖伝の神秘的な治療技術を生かしたと言われている。

当時のことをJ氏は次のように述べている。「このシンポジウムに参加するため、オーストラリア、日本、シンガポール、台湾など10カ国と地区、及び国内の20あまりの省市区

の骨治療に優れた専門家たちが壇に登って自分の接骨する絶技を演じていた。わたしは、一人の草原に生まれ育った医者（シャマン治療者——筆者注）として、海外と国内の医学界に何の人気もないのにこの様な盛會に参加することができて非常に感動した。参加者たちは次から次に壇に上がって自分の腕前を演じていたが、観衆を驚かせるほどの腕前を見せることはなかったし、人々を感動させる時刻も来ることがなかった。このとき、司会者が私の名前を中国語と英語で呼んだとき、私は非常に自信（先祖から秘伝した接骨技術に——筆者注）を持ちながら演台に上がった。わたしが直面したのは、左足の踝が粉砕的に骨折した12歳の少女患者だった。治療の最初に患者の患部に向って、酒を噴出した途端、患者が甲高い叫びを上げた。このとき会場の観衆がからかうように笑い始めた。そればかりか、何人かの外国の記者が先を争って撮影していた。彼等の考えでは、わたしはまったく医者ではなく、喜劇を演じている役者である。続いて、祖伝の神秘的なモンゴル医学の接骨療法で9分ほどの治療を経て、この12歳の少女は完全に回復した。少女は自ら演台から降りて、自由に歩き始めた。このとき静かであったホールに、たちまち爆発的な長時間の拍手の音が響き渡った。観衆は絶えず席を離れて少女を取り囲み、この神秘的な医術を自分の目で確かめていた……」（包金山 1996：138）

上に挙げた事例は、J氏が祖伝の神秘的な治療技術の力で、少女の左足の踝の粉砕的な骨折をシンポジウムの現場で治療して回復させたのである。このシンポジウムは1990年に行われたもので、中国が改革開放の政策を打ち出してから11年目のときだった。政府はJ氏が現代医学科学技術と異なった祖伝の神秘的な治療能力を持っていることを知っており、このシンポジウムに参加させたことは、やはりこの祖伝の神秘的な治療能力を認めている。民間の治療技術を含めた民間信仰が「迷信」とされた時代、つまり改革解放政策以前はこのような祖伝の神秘的な治療能力をもつ人にこのような機会を与えなかったのである。このこともホルチン地方の祖伝の神秘的な治療技術をもったヤスベラチ・ボーたちに自信を与え、盛んに活躍する舞台を提供しているのである。国立病院に勤めるヤスベラチ・ボーはホルチンジェグンガロンホイトホシヨのモンゴル医学接骨医院のほかに、通遼市の国立病院にも勤めている。



(J氏が治療を行っている)

## 2) 憑き物を払う儀礼の復興

ホルチン地方で、人に憑きやすい霊というのは、二種類がある。つまり怨霊と狐の霊である。怨霊というのは、なんらかの恨みをもって亡くなった人、夭折、自殺した人の霊のことを指している。この種類の霊はなかなか再び人間として生まれ変わることができないので人に憑きやすいと信じられている。怨霊に憑かれた人は、元気を失い、家事や外の仕事をする気はまったくなくなり、意味の分からない言葉を言ったり、欠伸したりする。このような場合、その家族の人が患者を連れてシャマンのところに行って、助けを求める。この二種類の霊に憑かれたとされる病気をモンゴル語でナールドブルト・エブチン (naaldubuto [nagalduboritu] ebqin [ebedqin]) という。この災いを救うのはシャマンの重要な役割である。シャマンは守護霊の超自然の力をもって患者に何かか憑いていることを見破って、どうすれば患者から離れていくかについて交渉する。たとえば、この怨霊がいち早く人間として生まれ変わりがっている場合には、①ジョリグ (zorig [zorig]) を作ることで患者から怨霊を切り離す。このジョリグとは、モンゴル語で交換という意味をもっている、つまりジョリグを怨霊に作ることで、患者の魂を取り戻すことができる。ジョリグとは、草で作った人形である。この草の人形を燃やす。これは怨霊が火の中から再生するという意味を表している。②ときによって、シャマンは、依頼者を寺に行かせ、ラマ僧にその怨霊のため、祈祷してもらうように求める。そうすることで霊を離せると言われている。ここで、寺院とラマ僧は、シャマンの問題解決の助けとして使われている。これは、シャマニズムと仏教の習合した姿である。怨霊を追い払う方法は色々あるがここで挙げたのは典型的な例である。この儀礼は、シャマニズムが弾圧される運命にあった時期に、一時的に行われなくなっていたが、近年になって復活している。

また、狐の霊については、モンゴル人は、細い毛をもった動物を殺すことを避けている。もし、それを殺すとなんらかの被害に当たると信じられている。この細い毛をもった動物というのは狐のことを指している。また、「狐は動物だろう、動物には人間に勝つ力がありえない」と思ってわざと殺してやると殺された狐の霊がその人、或いはその人の家族の誰かに憑いて苦しめると信じている。狐の霊に憑かれた人は病気になり、重いとき死んでしまう。また、笑ったり、泣いたりして精神的に異常が起きるのである。さらに、憑かれた人の口を通じて狐の思いを語る場合もあるとされている。民間信仰が「牛鬼蛇神」とされた時代に、シャマンが憑き物を追い払う儀礼を行うのは極めて少なかったが、近年にまた、復興の姿を見せているのである。1990代の初期に50代の猟師が狩りに行っていたところ廃墟の建物の中に二匹の狐が寝ていることを発見して、銃を持ってその場で撃った。そして、その猟師が獲物を持って家に帰ってきたが、猟師の娘がその夜から狐の目で人を見て、笑ったり、泣いたりして、次のように話した。「昼間夫婦二人で食事を取って、太陽の暖かさに恵まれて寝たばかりのところで、殺されてしまった。なんともひどい人間だ。家族全員を殺してやる」と言った。娘のこの話を聞いて、猟師はすぐ自分が殺した狐であることが分かって、娘を連れてシャマンのところに行って禱ってもらうよう求めた。シャマンはその猟師の娘に憑いている狐の霊と交渉して、離れていく条件を聞いた。すると狐の霊が猟師に殺されたことに対して、非常に不満の態度を持っていた。猟師を恨んでいる狐の霊は猟師の娘から離れていく条件をシャマンに言った。つまり狐の霊に謝り、狐の霊を喜ばせるよう求めた。そして、祭壇を設け、酒と乳製品、肉料理などを供えて、猟師と

娘は祭壇に向って跪いた。そこで、シャマンは次のように言った、「獵師の〇〇さんはわざと殺したのではなく、誤って殺してしまいました。この罪を許してください。再びこういうことをしません」と狐の霊に祈りをあげた。その後、シャマンは狐の霊に憑かれた獵師の娘に向かった酒を吹きかけた。これは悪霊に憑かれた女性を清めていることである。

ホルチン地方では、憑き物を払う儀礼については、シャマンが憑いている霊を追い払うのに、相談する方法と脅かす方法を取っている。患者に憑いている霊と相談して離れていく条件を聞き、それを満足させることで、追い払われると信じている。その内容とは、シャマンによって多少異なっているが、大体以下のようなものである①霊を供養する。②羊をつぶして霊を祭り、霊に謝る(たとえば、狐を殺した場合)。③ほしいものをあげる。たとえば、怨霊は金がほしいという。この場合、患者は市販の祭り専用の紙銭を燃やして与える。④美味しい食物、つまり肉料理や乳製品のチーズやバターなどを用意して殺された狐の霊に捧げる。⑤寺に行ってラマ僧に祈祷してもらう。⑥狐を殺した人が羊や豚を潰して宴会を開き村の人々を招待して喜ばせる。⑦天とオボー<sup>9</sup>を祭る。⑧公衆に役に立つ建物を建てる、或いは修繕する。たとえば、敬老院(老人ホーム)や学校の建物を修繕する作業を行なうなどいろいろある。⑨禁忌としては、あらゆる命を殺すことをしない。信仰上では特に龍の種類である蛇を殺さない。モンゴル人のシャマニズムの信仰の中で、家畜、特に羊を生贄にするのは仏教に帰依する前は当たり前だったが、仏教に帰依した後、仏教の教義に順応して、禁止されるようになったが、完全に止められなかった。しかし、シャマンが憑き物を追い払う儀礼に当たって、霊の追い払われる条件としてあらゆる命を殺してはいけないと求めているのは仏教の影響によるものと考えられる。⑩一定の期間内で樹木を切る、地面を掘ったりしてはいけないなど禁忌が挙げられる。

次に、脅かす方法とは、①シャマンが患者に「薬」のサイガを飲ませる。②痛めさせる。シャマンは最初に、友好的な態度を取り、患者に憑いている霊から離れて行くことについて条件を聞く。しかしその条件をシャマンに教えてくれる霊もあれば、どうしても教えてくれない霊もある。このような粘り強い霊の場合、シャマンは払い離すのに7日間から21日間かかるという。この場合では、シャマンは強硬な態度をとる。霊に憑かれると患者の魂はもう完全に抜かれている状態にあり、その代わりに他の霊が憑いているのである。だから、シャマンが患者の体を針で刺しているのは、憑いている霊を刺していることである。そうすると、霊は話し始めると言う。③オンゴッドを患者の首にかけておくなどの方法が挙げられる。

シャマンは霊を追い払うため、患者に憑いている霊の態度に応じて柔軟的対策と強硬な対策をとっている。憑き物に関する信仰とそれを追い払う儀礼は、霊魂信仰のもっとも集中的な体现として、昔からモンゴルのシャマニズムの一つの重要な内容である。ホルチン地方では、政府が設立した病院に身をおく骨の治療を専門としたヤスベラチ・ボーを除くと憑き物を追い払う儀礼を執り行わないシャマンはほとんどいないのである。一方では、この憑き物を追い払う儀礼をホルチン地方では、仏教が広がった後、ラマ僧も執り行うようになっていたのである。これは、文化大革命が始まり、寺が崩壊されるまで続いていたのである。「昔は、ホルチン地方では、不幸なことに遭ったら、寺に行き活仏に助けを求めよう求める。活仏の教えに従って、ラマ僧を家に招き祈祷してもらう。重い病気(主に精神病、つまり、霊に憑かれたとされる病気)にかかり、先生に診てもらっても治らな

いは場合は活仏のところに行って祈祷する。そして、活仏に言われた通り何人かのラマ僧を招き祈祷してもらう。招いたラマ僧を非常に敬い歓待する。またお礼として贈り物（牛、羊、米、金、布、乳製品などどれでもいい）をささげる。贈り物をささげられない場合では薪などをささげるか、寺の壁を修繕する」（胡日樂巴特・烏仁其木格 1988：361～362）と言っているように、文化大革命時代まで、寺でラマ僧も依頼者に応じて、風俗習慣上における現象（憑き物払うなど）を解決する役目を負っていたが、寺が崩壊され、ラマ僧が還俗させられた後、シャマンだけが執り行うことになっている。シャマンのこの働きは、ホルチン地方のシャマニズムの復興現象を構成している重要な内容になっている。

一方、精霊に関する信仰は、シャマニズム信仰の中核になっていることを見てきたが、ホルチン地方のシャマンの憑き物を追い払う儀礼において、次の意味を示している。一つは、霊界での戦いである。つまりシャマンの守護霊及び補助霊と患者に憑いている霊との戦いである。たとえば、患者から離れて行きたくない霊に対してシャマンは強硬な態度をとる。もう一つは、この戦いにおいて、結果的にシャマンの勝ちで終わる。つまり、シャマンによって追い払われる。

### 3) 祭天

今現代のホルチン地方では、家族単位、そして個人単位という形で行われている。モンゴル人にとって、シャマニズムの信仰体系において、最高の神は永遠の天で、「故に天は物質的実在であると共に、且つ精神的実在である」（バンザロフ 1971：8）。「モンゴル人の天に対する概念では、天を世界の支配者、永久者、正義者及び生命の泉としている」（バンザロフ 1971：10）。モンゴル人は“ムンヒンゲテングリ”、つまり、「長生天」や「蒼天」と呼んできた。「モンゴル人の説によれば、天は人間の一切の行為及び思想を洞察し、人間は決して天の儀なる裁判を免れることができないというのである」（バンザロフ 1971：12）。天をモンゴル人は一般的に、“テングリ・アープ”、つまり「父なる天」と呼ぶ。モンゴル人は何かにあつたら天に祈り、神である天の加護を求める。絶対的権力者としての天神への絶対的な信仰は、永遠に湧く泉のようにモンゴル人の心の中から湧き出ている。だから、モンゴル人のあらゆる習俗、祭りにおいて、祭天は欠かせなかった。しかも、常に最初に行われてきた。日常生活においては、人々は酒を飲むとき、杯に薬指をひたし、天に向かって弾き飛ばす。そのとき、よその人から見れば、何も言っていないかもしれないが、実は心の中に「食べ物の初物を先に天にあげている」と言い、敬意を払っているのである。美味しい料理を作って、出来上がったら、食べる前に、先に茶碗の上の部分から肉と野菜、つまり初物をとって外に出して、天へ向かって散らす。次に祖先の墓の方向に向かって散らす。年中行事のなかで、モンゴル人が正月を一番大事にするのは言うまでもない。家を離れて勉強や仕事をしている家族の成員はなるべく帰省して一家団欒をする。そして、この特別な日に祭天を行い、祖先を祭祀することが無意識の中に、家族の絆を強めさせ、家族内部の団結力を強めさせる機能を果たしている。

一般的に、家単位<sup>10</sup>で行われる祭天とは、ホルチン地方では一つは、正月の行事に当たつての大晦日と元日の朝の大体六時ぐらに行う。もう一つは、旧暦の7月に行われる。また、病気や不幸なことになった場合、シャマンの指示を受けて家単位で祭天を行うのもある。

ホルチン地方のシャマンは、祭天を非常に重視してきた。ヤスベラチ・ボーのQ氏は祭天については大きな祭りや日常的祭りととの二つの形で行われているという。Q氏によれば、三年ごとに一回天への大祭を行うという。この大祭とは、赤祭りの事を指している。つまり羊を生贄とした祭りである。やり方としては、陰暦の9月9日に、羊をつぶして、その肉と骨を残さずに大きな鍋に入れて煮る。そして、出来上がったらずその肉料理の初物を取って庭に設けた祭壇に供えておく。供物としては酒、肉、チーズ、バターなどが用いられる。シャマニズムが衰退した時期に、シャマンが自ら羊を生贄とした祭天は少なかったが、今現在になると、シャマンの数多くの出現に連れて、このような祭りが増えている。シャマンは神服の一種類である赤いエプロンを腰に巻き、杯に酒を入れて、外に持って行き、薬指を杯にひたし、最初の一滴を天に向けて親指と薬指で散り飛ばして最高の神である長生天に捧げる。そして地に向けて地霊である龍神に、最後に祖霊を含めた地方の神霊（守護神）に向けて、それぞれ弾き飛ばして捧げる。祭天は陰暦の7月は一番多い。上に挙げたヤスベラチ・ボーのQ氏は祭天儀礼を陰暦の9月9日に行われているのは漢文化の影響だと考えられる。ホルチン地方のシャマニズムの復興の中で、民衆はシャマンを家に招いて祭天儀礼を司会してもらっている現象は多く現れている。

モンゴル人は、雷を“テングリドーフ” (duugruh[duugarho])、「天が鳴る」と言う。ここで、神である天が鳴ると言っているのは、やはりモンゴル人は天を人格化していることが分かる。昔から稲妻に打たれて死んだ家畜を「天に当てられた」と言い、その亡骸を処理するにはシャマンを招いて儀礼を行ってもらってきた。稲妻に人が打たれて亡くなるとシャマンが招きその遺体をシャマンがばらばらに解体して樹の枝に掛けておく。こうすることで鳥などに食べさせ、亡くなった人が早く再生できるよう願っている。ホンダン・シャマンのP氏の話によると、前に、ある農民が祭天儀礼の司祭者として招かれたが、現場に行くと、天に捧げようとしている生贄は羊ではなく、豚だった。ホルチン地方の農業化した村落では、羊を完全に飼わなくなった農民モンゴル人がいる。農民たちが家で飼っているのは、豚、鶏、犬、猫などである。そして、豚肉は日常食卓に欠かせないもので、一年にかけて、季節ごとに一回豚を潰して食べる世帯があれば、夏と冬二回潰して食べる世帯もある。その人々にとっては、豚を毎日のように心を込めて育てたものなので、祭天に最適だと考えるのである。しかし、シャマンから見れば、それは、昔からの習慣と違うのである。モンゴル人は天を祭るときに毛が白くてしかも育ちが良い羊<sup>11</sup>を選んで天に捧げるのである。シャマンのP氏にとって、豚をもって天を祭ろうとしていることは前代未聞のことなので、どうしても受け入れることができなかった。そしてその家の人々に羊に変えるよう求めた。これは、シャマンを招いて祭天を行う際にあったことである。実は、ホルチン地方では、家単位で祭天と祖先祭祀にあたっては豚や鶏が羊の代わりに頻繁に使われていることが調査で分かった。一方で、シャマニズムの信仰体系の主体であり、しかも宣伝者、担い手であるシャマンは昔からの習慣を固く守ろうと努力している。

家畜が稲妻に打たれたらホンダン・シャマンをその場に招いて、祭天儀礼を行う。このときに祭る天の名前は“チャヒルガン・テングリ” (chahirgan tener [chahirgan tegri])、つまり雷神である。そう言いながら、実際に祭って、祈りを上げるのはこの雷神だけではないことがシャマンの祈祷文から分かった。もし、ホンダン・シャマンがその周辺に住んでいない場合は、他の男のシャマンを招き儀礼を行ってもらう。

天はモンゴル人にとって二つの意味を持っている。「北アジア騎馬遊牧民族の間で使われてきたテングリという言葉だけを単に天神と理解するだけでは不十分であり、天上界の概念も含まれていることに注意を払わなければならない」(ゲレルト 2003:73)。ここに言っている「天上界」というのは、つまり、天の神を含んだ神々の住む場所として捉えられているのである。モンゴル人は「ロス (loos [loos]) が雨を降らせている」という信仰がある。ロスというのはモンゴル語で龍のことを指している。ここで、地霊である龍の住む場所は地の深層水宮であるとされている。一方では、龍は天にも登る力があると信じられている。雨を降らせるのは、やはり天からなので、天に龍がいないと降らせることができない。この意味で、龍は天上界、つまり天上の神々の住む天上界にも住むという意味になる。今でも、モンゴル人がオボーを祭ることで天の神と地の神の龍を喜ばせると信じられている。ホルチン地方のあるシャマンが「オボーはロスの宮で、したがってオボーはロスである」と語った。

一般的にモンゴル人は蛇を殺さず、食べない。それは蛇を“ロス”だから殺してはいけない、食べてはいけないと信仰しているからである。蛇のことを“ロス”と言っているのは、一つは、モンゴルのシャマニズムの信仰体系の中で、蛇と龍を同じ物として考えていることが分かる。同一視しているのは、蛇と龍を同じ動物だという意味ではなく、精霊の世界、つまり水を含んだ地の神という点では同一視していることである。そして、水を含んだ地の神である龍と蛇がシャマンの守護霊や補助霊としてホルチン地方のシャマンの助けとなり、非常に重要な役割をも果たしてきた。ホルチン地方のシャマンのなかに銅製や木製の龍や蛇のオンゴッドを持っているシャマンもいる。「龍蛇についての観念や造形は、シベリアのシャマニズムのなかで、とりわけ根強い特徴となっている。シャマニズムの世界観では、神話に語られてきた龍蛇の特質やイメージはそのままに形ではなく、様々な特性や能力が付け加えられ、龍も蛇もシャマンにとってはきわめて強力な補助霊となっている」(荻原 1992:144)。蛇はシャマンの守護霊になる事例は少なくない。一方では、龍は天にも登る力があると信じられている。雨を降らせるのは、やはり天からなので、天に龍がいないと降らせることができない。この意味で、龍は天上界、つまり天上の神々の住む天上界にも住むという意味になる。今でも、モンゴル人がオボーを祭ることで天の神と地の神の龍を喜ばせると信じられている。ホルチン地方では、新婚夫婦は結婚式に、まず天に跪いて拝む。草原や野外から三角や四角の鉄片を見つけるとそれを「天の矢」と言い、家に持ってきて大事に保存するとか、或いは小さい子供の首にかけさせるとか、赤子のゆりかごにつけておくなどの習慣がある。そうすることで、邪気を追い払い、病気を防ぎ、健康に育てられると信じられている。また、天の矢というものをシャマンは用いて、病気を治療する際に使われている。しかし、シャマンの使っている天の矢は必ずしも外から拾ってきたというのではなく、病気治療ための道具としてわざわざ造ったのである。

#### 4) ウジェーチの活躍

上に挙げた事例の中で、ホルチン地方のシャマンの一種類である占いを行なうシャマンの役割をすでに見てきた。経済の発展につれて、人々の現実の生活において、いろんなことに直面している。人々の生活は豊かになりつつある一方、社会の厳しい競争の中で、精神的に不安の状態も現れている。ホルチン地方のウジェーチの存在は、こういった人々に

とってよい相談者になっている。運勢占いは一つの重要な内容である。出世、昇進、金運、商売、受験の結果、病気、風水などが挙げられる。

昔からウジェーチの一つの役割は縁起の良い日悪い日を預言して定めることである。モンゴル人は一般的に、日常生活において、大事なことを行うときウジェーチに預言してもらうのである。その内容は、結婚、開業、引越し、着工、外出、井戸を掘る、井戸を埋めるなどが挙げられる。しかし、以上に挙げた内容を行うのに、ウジェーチに預言してもらわないで、自分で「勝手」に行き、後に何か不幸なことに遭ったとき、ウジェーチのところに行き、原因の究明と対策を求める場合がある。ウジェーチは縁起の悪い日にしたのは不幸の原因だと占ってくれる。

たとえば、ホルチン地方では、使わなくなった井戸を処理する方法は二つある。一つは、井戸を埋める。もう一つはそのままに廃棄する。一旦できた井戸を滅多に埋めないのである。どうしても埋めなければならない場合には埋めるのである。しかし、井戸を埋める場合と廃棄する場合には儀礼を行わなくてはならない。井戸に地霊、水霊、つまりロスが宿っていると考えられている。もし、井戸をそのまま放棄しておくならば、家の主人が井戸に乳製品を捧げる。もし井戸を埋めるならば、ウジェーチに縁起の良い日を定めてもらって、シャマンを招き<sup>12</sup>、シャマンの祭司の下で行う。シャマンはまず、守護霊を体に移らせる。次に、井戸の守り神であるロスに乳製品をささげる。そして、祈祷文を唱える。その後井戸を埋める作業を行う。一方、縁起の悪い日に井戸を掘ったせいで遭った不幸なことから立ち直るため、或いは再発を防止するため、シャマンの指示通り儀礼を行う。この儀礼がロスを祭る儀礼と言われている。やり方は、動的水、つまり川や井戸に乳製品を捧げて地霊、水霊のロスから許しを求める。ここで、必ず動的水に供え物をささげることが必要とされている。静的溜まり水、つまり湖にささげてはいけないのである。川と井戸の水は「生きている」ので、そこに地霊、水霊のロスが宿っていると信じているからである。

ウジェーチは単なる占いを行なうだけではなく、憑き物払いなどの「治療」も行っている。ホルチン地方のウジェーチの盛んな活動はホルチン地方のシャマニズムの復興の重要な内容になっている。

#### IV. ホルチン地方のシャマニズム復興の意味

シャマニズムはモンゴル人の太古以来信仰してきた原始信仰として、長い歴史の中で人々の日常生活の中に生きてきた。この信仰が、長い歴史の中で、何度にもわたって支配階層によって弾圧される運命に出会った。しかし、ホルチン地方では、シャマニズムの信仰体系の一番集中的な実践者であるシャマンが弾圧される運命に柔軟に対応して、生き残ることができた。1980年代から、法律の許可の範囲で、宗教信仰が可能になって、ホルチン地方のシャマニズムが再び脚光を浴び、復興の姿を見せ始めた。この中で、シャマンは中心的な役割を果たしている。

以下はシャマンの果たしている役割についてまとめを行う。

①シャマンの果たしている多種の役割の中で病気治療は非常に重要な位置を占めてきた。シャマンにおける病気治療は昔から今まで、シャマニズムの世界観、つまり精霊の超自然の能力に基づいた治療であり、依頼者もこの点に惹かれて治療を求めて絶えずシャマ

ンを訪ねている。社会の発展につれて、現代的な科学医療技術が人々の生活により浸透している今日では人々が求めているのは治療効果である。一方、シャマンの精霊の力による神秘的な治療能力が社会から認められている。これは、シャマニズムの信仰に強く生命力を与えているのである。「精密な科学がすでに大きく進歩したと言っても、神秘主義はやはり現状を維持している。大科学者の知恵にも多くの死角がある一方、神秘主義にもそれ自体、聡明なところがある」（漆浩 1999：164）。今のホルチン地方で、シャマンの病気治療は精神的病気と肉体的な病気について治療を行っている。その中で、骨の治療を専門としたヤスベラチ・ポーの果たしている役割はもっとも顕著で、幅広く人気を得ている。この人気の原因はつまり治療効果である。また患者の精神的に起こった異常な現象を現代的な科学医療技術によって治せるのは難しいが、シャマンは病気が精霊によるものと判断して、守護霊や補助霊の力を借りて治療を行って治すことができる。精霊によって精神上に起こった「病気」を治療するのに、シャマンによって治療方法が異なる点があるにも拘らず、精霊の観念が横たわっている。

②シャマンが、儀礼において祭司者として機能するのは、シャマンのもう一つの重役である。儀礼は、信仰者たちの信仰心の集中的な体现である。しかも、伝統文化の集中的な体现でもある。伝統文化が現実の社会の影響を受けて時代とともに変化していく傾向がある。シャマンはこの伝統文化であるシャマニズムの信仰体系の精通者、実践者であるので、儀礼に祭司者としての役目を負うのは当然のことである。儀礼の祭司者でありながら儀礼の総監督でもあると言えよう。伝統文化をそのまま残しておきたい、永遠に人々の心の中で生きてほしいと言うのはシャマンの最初の動機である。この意味で一ホルチン地方のシャマンは民族的アイデンティティの担い手として、民族の伝統文化的コスモロジー＝イデオロギーの一番有力な宣伝者、保持者である。たとえば、天はモンゴル人にとって絶対的な最高な神として信仰されてきたが、天への祭りの儀礼の復興において、民族の昔からの風俗習慣の有効的な実践のなかで、豊富な民俗知識と経験を身につけたことだけではなく、シャマニズムの信仰体系に対し強く保護する意識をもっており、この信仰体系の有力な宣伝者で伝統を守る機能を果たしている。儀礼のやり方とそれに反映されている信仰をなるべくそのまま残したいと願っている。

③シャマニズムの観念を現実の生活の中で生かしているのである。ここで、近年盛んに活動している占いを行うシャマン、つまりウジェーチの人気度の高さはその有力証明である。シャマンは人々の精神を癒し、頼れる存在にもなっている。精霊の信仰を中核としたシャマニズムの信仰体系が人々の心の中に生きている限り、シャマンは人々に必要とされる。また、シャマンの存在がこの信仰体系を活性化させ、生命力を与えてきた。今のホルチン地方では、ウジェーチはシャマンの中で人々の生活からもっとも近い存在である。人々は、現実の生活における自分が判断できない身の回りのことをウジェーチに訴え、その聖なる判断を求めている。若い年齢層において、将来に関する預言を求めている人は非常に多い。結婚相手に関する相談は多い。たとえば、依頼者は自分が通常の状態では知ることができない交際相手の本質はどういう人か、浮気するかどうか、金を儲けられるかどうかなどを「分かる人」であるウジェーチによって答えてもらうよう求めている。また、近年になって、妻は夫の官職の運命、金に関する運命、浮気などがよく気になって、盛んに占いを求めているという。受験生は試験の結果と希望しているところに受かるかどうかを尋ね

るのが多くなりつつある。

④復興するシャマニズムの信仰が人々の心を浄化し、社会の道徳を規制する機能をも果たしている。今現代のシャマンがある意味で、人々の精神的な指導者の機能を果たして、人々の心を浄化する役割をも果たしている。ここで、まず一つの事例を見てみよう。

2001年の七月にある新聞社の人事部長として務めていた50代のM氏が大学時代の同級生に、あることを頼まれた。それは大学を出たばかりの娘によい仕事を探してくれるよう頼まれ、仕事先の担当者に献金するよう1万元(約15万円)を渡された。一方、その同級生の娘が自分で仕事を探し、試験を通じて、良い仕事を見つけた。そして、その娘が父の同級生のM氏から1万元(約15万円)を返してもらうよう求めたが、M氏が返してくれようとしなかった。幸いなことに、このM氏にある有名なシャマンの友人がいて、ある日シャマンに「その金を返してやって、そうしないと自分の今後の道によくない。人々のため良いことをし、心を清めなさい」と言われた。それから何日の後、同級生の娘がもう一度金を返してもらうようM氏を訪ねたところ、M氏はすぐ返してくれたようである。

上に挙げた事例は、M氏がシャマンの指示を受けて、同級生から渡された金を返したのである。もしM氏がシャマンの指示を受けなかった場合、M氏になんらかの言い訳をしてその金を返さない可能性がある。しかし、M氏はやはりシャマンの話信じ、超自然の精霊の存在を信仰している。ここで、もしシャマンに言われた通りにしないと自分は超自然の存在からの罰を受けると信じているからである。50代のM氏の目の前に一番関心がある個人的なことは、自分と家族の健康と子供たちの社会での出世と自分の位置を保持することである。これらが何かに遭うと心のバランスが崩れ落ちる可能性があることを十分に知っている。ミハイイ・ホッパーがシャマンのこのような人々の人格を強めさせ、精神の平衡をもたらす役割をすでに見抜いて、次のように述べている。「再興されたシャマニズムは物質主義に取り付かれた、自己中心的な現代の文化に、開かれた、利他主義のイデオロギーを対置することに成功するだろう。別の生き方、金のかからない自己療法、もう一つの肯定的な生のプログラムを提供するだろう」(ホッパー 1998:47)。

ちなみに、ウジェーチの効能に注目している現在では、シャマンのところに役人も良く訪れていると言う。モンゴルの諺に「善心であれば牛乳、悪心であれば灰」、また「いつも善心を持ち、人々を助けていけば、子孫は良いことに恵まれる」、「人々をいつも助けて行けば、早ければ自分に、遅ければ子孫に良い運命が訪れる」と信じられている。ある人が、出世して立派な成績を取めると人々から「先祖が生きていたときに人々に与えた善心が子孫に神の恵みをもたらした」と言われ、また、その人自分自身もそう思うのである。これもやはり、モンゴル人のシャマニズムの世界観に関係している。上にも挙げたように「万の目がある天」、また、仏教の影響を受けて、「仏と天は万の目がある」とよく言う。モンゴル人の考えでは天を含めた神や精霊はいつでもどこでも人間の行動を観察し、それによって正確な判断をくだすとされている。人々に助けを与えていることをモンゴル語で“ボヤン・ウイロドホ”(boyan uiilehdh [boyen uiiledhu])という。日本語で直接的に言えば、“福を創る”と言う意味である。もし、人々になんらかの被害を与えるとその分が自分になんらかの形で戻ってくると一般的に考えている。人々に与えた悪い分は自分に戻ってくるのはやはり超自然の精霊や神によるものだと信じている。シャマンも依頼者の助けとなる自分の行動について、「人々を助けることで、精霊の恵みを得ることを願っている。そ

れによって、子孫を支持して、子孫が人々と肩を並べていけることを願い、人々と同じようにうまく生きることができればと望んでいる」と50代の女性のシャマンのC氏が言った。このように精霊に関する信仰が、モンゴル人の日常生活の中で根強く生きてきたのである。シャマニズムの復興現象において、この信仰は強まる一方である。

ホルチン地方のモンゴル族のシャマニズムは、昔から今現在でも超自然の霊的存在に対する信仰を中心としている。一方では、時代の進歩することにつれて、人々はあらゆる現象を超自然の力、つまり霊的な存在から原因を探ることがなくなっているが、精霊に対する信仰が人々の日常生活から離れたことはない。精霊に対する信仰が、人々の心理上では崇拜、畏怖、依頼などの形で表されている。これは、人々の行動に何らかの形で影響している。日常生活におけるシャマニズムの信仰に関わる禁忌が一番よい証明だと言えよう。そのため、外部から降りかかる弾圧に柔軟に対応しながら、自分を保持してきた。機会が生まれると、シャマニズムの信仰が復興し始める。

(さらんごわ 本研究科博士後期課程)

- 
- 1 今のダフル族のことで、当時“ソロン”と称されていた。今の黒龍江省のノン江の流域を指している。
- 2 以前のジリムアイマッグ (zirim aimag[zirim aimag])、つまり哲里木盟のことで、2000年に通遼市と改名した。
- 3 モンゴル族をここで、モンゴル人という言い方を取りたい。ここで、モンゴル人という言い方をとったのは、ウノ・ハルヴァの『シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像』という本に基づいて使った言葉である。今日のモンゴル人に、モンゴル国のモンゴル人、ロシア境内に住んでいるカルムクモンゴル人、ブリヤートモンゴル人、また中国の、内モンゴル自治区に住んでいるモンゴル人(族)、新疆ウイグル自治区、青海省、甘肅省、遼寧省、吉林省、黒龍江省、雲南省などに住んでいるモンゴル人のことを言っている。
- 4 シャマニズムという学術名に対応しているモンゴル語。
- 5 中国の漢民族の伝統節句である。毎年陰暦の4月5日前後にあたる。祖先祭祀を行う日で、墓参りする。この節句はまた、ペー族、苗、モンゴル、ナシなど少数民族も行われる。漢民族の影響を受けてホルチン地方のモンゴル人も清明節に墓参りして祖先祭祀を行う。
- 6 「トランス (trance) というのは恍惚・忘我の異常心理状態のことを指している」(桜井徳太郎 1995: 17)、儀礼において、シャマンの恍惚・忘我状態に入ることを表す「トランス」という表現をなるべく使わないように努めている学者はいる。それは、アメリカの人類学者のマイケル・ハーナーである。なぜならば、「トランスという概念は、「無意識状態」という意味合いをもつことが多いからである」(ハーナー 1998: 101)。マイケル・ハーナーは「トランス」という表現の代わりに「シャマンの意識状態」という表現を用いている。また、「意識の変容」「変性意識」という表現を賛成している。
- 7 ミハイイ・ホッパールによれば、「中央アジアのテュルク語系諸民族においては、バクシ baksi とは病氣治療の能力を持ったシャマンであると同時に放浪の歌手でもある」(ミハイイ・ホッパール『シャマニズムの世界』、青土社、1998年)。
- 8 憑依型シャマンをさらに、一時憑依型シャマンと常時憑依型シャマンという二種類に分けられる。①一時憑依型シャマンとは、依頼者から頼まれ、その依頼に応じてシャマンの服を着て、太鼓を叩きながら祈禱文を唱え精霊を招き、自分の体に移らせる(神がかりになる)ことによって、精霊の超自然の能力を借りて、占い、予言、治療を行うタイプのシャマン。このタイプのシャマンはホルチン地方では非常に普遍的である。また、シャマンは守護霊を招き呼んで自分の体に移らせて、非日常的意識状態に陥って病氣治療を行う。そして、終わると精霊を帰らせるのである。そうすることで、シャマンがまた、儀礼前の日常状態に戻るのである。このタイプのシャマンを一時憑依型シャマンと呼ぶことにする。②常時憑依型シャマンとは、守護霊がシャマンの体に常時憑依しているタイプである。このタイプのシャマンは主に占いを行うシャマンと接骨・整骨を専門にしたシャマン(ヤスベラチ・ボー)で、治療を行うに当っては神降ろし、つまり精霊を招き身体に移らせるという儀礼は行わない。守護霊がシャマンの体に常に憑いているということで、いつでもどこでも、依頼者に応じて治療を行うことができる。シャマンに常に憑依している守護霊は、脱魂型シャマンと一時憑依型のシャマンのように動物の霊、或いは亡くなったシャ

マンの霊や先祖の霊である。しかし、質的に異なるのは、常時憑依型シャマンの場合、病気治療にあたっては意識の変換、つまりトランス状態を見せない。一方では、脱魂型シャマンと一時憑依型シャマンの場合、病気治療などにあつては、守護霊を自分身体に乗り移らせてから行われるので、もし動物の補助霊を招きよせた場合、その動物の行動をとる。

また、エリアーデは脱魂型シャマンをシャマニズムの最も典型的特徴だと考えていた。「脱魂とはトランスの間に魂は肉体を離れて天上界に昇り、地下界に降りてゆくと信じられる」(エリアーデ 1974: 8)と述べている。現在のホルチン地方のシャマンの脱魂型と憑依型から見ると、やはり憑依型のシャマンのほうが圧倒的に多い。一方、ホルチン地方ではこの脱魂型シャマンは儀礼において、何らかの原因で魂が抜き離れた患者の魂を取り戻すためシャマンの魂が飛翔して探すのだとあるシャマンが語った。

<sup>9</sup> オポーとは「土地の住民の保護者たる所の神霊および土と水との龍の在住处として、且つこれらの諸神に供する献祭の場所として建設せられる。オポーの場所としてはその位置が快適で、雄大なまた高い山地の草と水とにと富める場所を選ぶ」(バンザロフ 1971: 25)。

<sup>10</sup> 家単位の範囲は大体世帯単位で行われている。

<sup>11</sup> ここで、モンゴルにいつも山羊と綿羊という二種類の羊がいるが、祭りにあたってはどちらでもよいという。

<sup>12</sup> ここで、この儀礼を行うのに、もちろんウジェーチが祭司者として執り行っても良いのである。あくまでもウジェーチはシャマンの一種類。

#### 主な参考文献

##### 和語

- (1) ソハン・ゲレルト、「モンゴルハンたちの世界観」『東西南北』和光大学総合文化研究所、2003年3号
- (2) 佐々木宏幹、(2001)『アジア漢文化地域の民俗宗教に関する宗教人類学的研究』駒澤大学文学部文化学教室
- (3) 漆浩著、池上正治訳、(1999)『中国養生術の神秘——医術・巫術・気功』出帆新社、初版第一刷発行
- (4) 佐々木宏幹、(1999)『東アジアにおけるシャマニズム文化の構造と変容に関する文化人類学的研究』駒澤大学文学部
- (5) 萩原眞子「北アジアにおける龍と蛇—伝承と造形からの断章」『アジアの龍蛇—造形と象徴』雄山閣1992年
- (6) 佐々木宏幹、(1983)『憑霊とシャマン』東京大学出版会
- (7) バンザロフ、ウエー・エム・ミハイロフスキー著、白鳥庫吉、高橋勝之訳、(1974)『シャマニズムの研究』、新時代社、1971年(この本はバンザロフの「黒教或いは蒙古人におけるシャン教」という論文とウエー・エム・ミハイロフスキーの「シベリア、蒙古及び欧露の異民族間におけるシャマン教」という論文から構成されている)
- (8) ウノ・ハルヴァ著 田中和彦訳、(1971)『シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像—』、三省堂

##### モンゴル語

- (1) 古日查・長命、(2001)『科兒沁蒙古史略』中国・北京・民族出版社
- (2) 尼瑪、(1999)『靈魂・偶像・信仰』中国・北京・民族出版社
- (3) 呼日樂沙・白翠英・那琴・宝音朝古拉、(1998)『科爾沁薩滿教研究』中国・北京・民族出版社
- (4) 呼日樂巴特・烏仁其木格、(1988)『科爾沁風俗誌』内モンゴル人民出版社

##### 中国語

包金山「モンゴルの接骨事業を發展させ、党と人民に恥じるところがない良い医者になる」(手稿)(1996: 138)